

＜日本イギリス哲学会 第73回関西西部会例会 報告要旨＞

報告1：J. S. ミル幸福論の再検討：表象的快樂説と快樂の質

鈴木 真

J. S. ミルの幸福論や快樂の質の議論については、様々な解釈が提示されており定説はない。また、ミルの立場が整合的でないという批判も根強くある。本発表では、ミルの一次文献に立ち返り、幸福の「表象的快樂説」と呼びうる立場をミルが採っていることを示し、それと快樂の質の議論を整合的に解釈することを目指す。なお発表者は以前に類似の主題で論文を公刊したが（「J. S. Millにおける二つの快樂の質の概念と価値の快樂説」倫理学研究30号、2000年）、その解釈と本発表における快樂とその質の説明は異なるものになる。

ミルの幸福論を一種の完成説や欲求充足説と捉える解釈もあるが、ミル自身が快樂と苦痛からの自由だけが望ましいものだとして明確に言う（『功利主義』2章）、その立場を擁護するという形で『功利主義』は展開していくことから、作業仮説としてはミルが何らかの快樂説を採っているという伝統的な解釈を採用できる。『ハミルトン卿の哲学の検討』25章では、ハミルトンのアリストテレス的な快樂論とその価値の理解——快樂は生の諸機能を充足する活動を完成するものとしての認知経験であり、その機能が高級で活動がうまくいって認知経験が正確であるほどに快く価値がある——が退けられている。また『人間精神の諸現象の分析』（以下、『分析』）の注釈をみると、快樂は特定の感じ方だというイギリス経験論の伝統的な考えをミルが継承していることがわかる。『功利主義』3章では、ある対象（例えばお金や徳）が最初は快樂ではなくその手段でしかなかったが、後々それ自体が快樂となることがあると言われているが、『分析』の注釈によるなら、これは正確にはその対象の観念が元來快樂であった心的状態と連想により緊密に結びつくことでそれ自体快樂を帯びた状態を構成するということである。連想は時に「化学的結合」を形成するとされ、それによりある観念（例えば無限や統一の観念）がその構成要素である心的状態とは質的に違うものとなることもあるとも言われており、ここに快樂の質の違いの契機があることがわかる。元となる快樂とそこから化学的結合により構成される快樂は、時に違うように感じられ違うように欲求されるが、その差異はそれらを構成する表象やその内容により生じる。

結論としては、ミルの幸福論は、原初的な快樂から連想により形成された様々なタイプの心的状態をすべからず快樂とみなした上で、快樂を構成する心的状態に内在する表象とその内容の違いを重視し、そこに質の差や価値の違いを見出す。この説は快樂説であり、快樂が含む表象の対象は快樂と独立に価値を持つ訳ではない。この幸福論の背後にある心理的主張には異論の余地があり、そのためそれを基礎に持つ自由の擁護論等にも懸念は生じるが、ミルの表象的快樂説や快樂の質の議論自体が不整合だという批判は退けられる。

（すずき まこと・名古屋大学）

報告 2 : アイザイア・バーリンと冷戦初期のリベラリズム

森 達也

Cold War liberalism とは、文字通りには「冷戦期のリベラリズム」とも受け取れるが、実際にはより狭い意味で用いられる言葉である。たとえばジョン・ロールズは確かに冷戦期の代表的なリベラルのひとりであるが、通常、彼を冷戦リベラルと呼ぶことはない。Cold War liberal とは一般に、冷戦という特定の間の中でリベラルな諸価値や諸制度を「政治的に」擁護しようとした知識人や政治指導者を指す。ヤン＝ヴェルナー・ミュラーによれば、それは ‘politically engaged form of thought’ であり、代表的人物としてバーリンの他にはカール・ポパー、ラインホルト・ニーバー、ノルベルト・ボッビオ、レイモン・アロン、ジュディス・シュクラークらの名前を挙げている。ミュラーは冷戦リベラルの特徴を、①多元論と反決定論、②消極的自由とリベラルな立憲主義の擁護、そして③まっとうな社会保障の要求（ある種の社会民主主義）の 3 点に要約している。

ヘレナ・ローゼンブラットはこうした特徴（特に消極的自由の重視）を冷戦リベラルの「防御的な姿勢」として批判的に考察しているが、他方で彼らの知的姿勢には固有の長所も認められる。たとえば、冷戦リベラルは総じて「リアリスト」に分類されるが、必ずしも軍事的な意味で好戦的ではなく、非人道的な手段を用いて敵に対抗することを望まなかった。彼らはむしろ敵を理解することに務め、そこから妥協の余地を引き出すことに注力した（理解と妥協を重んじるバーリンの姿勢は彼の「価値多元論」として知られている）。それゆえ彼らは規範の哲学的論証よりもむしろ人間の気質や心理的傾向に注目した議論を展開している。バーリンが賛意を示したというジョージ・ケナンの「封じ込め」も、その軍事主義的な印象とは異なり、まずもってそうした人間の心理的性質に注目した政策であった。バーリンが *Foreign Affairs* 誌に寄稿した 4 本の論文のうち 3 本はソヴィエト・ロシアの政治と文化に関するものである（もう 1 本は *Four Essays on Liberty* 所収の「20 世紀の政治思想」）。これらの論考は彼が「敵の理解」に長じていたことを端的に示している。また、その半数が同誌が彼に執筆を依頼したものであるという事実は、彼がアメリカ政府関係者およびその周辺人物と親しい関係にあり、そうした人的ネットワークの中で現実政治と日々対峙していたことを暗示している。加えて、これらは 1940 年代の終わりから 50 年代にかけて執筆された論文であるため、冷戦の初期の局面と不可分の関係にある。

ミュラーは冷戦リベラルとしてのバーリンの特徴を巧みに描き出しているが、彼の「政治的関与」の実相に迫るためには、私たちは上記 *Foreign Affairs* 誌掲載の諸論考を繙き、書簡などを参照しつつ、当時の政治状況との関連からバーリンの言葉と行動を理解する必要がある。本報告はこの課題遂行に先立つ試論である。権威主義、ポピュリズム、そして「認知戦」が台頭する今日の政治状況において、私たちは彼および彼らの知的・政治的姿勢から多くを学ぶことができるだろう。

（もり たつや・神戸学院大学）